

COOP-JOSO News Letter

【ものづくり 人づくり 地域づくり】 原発事故子ども・被災者支援法の具体化を

商品説明キャラバン スタート!

商品部職員と先輩組合員が常総生協の食材 の特徴、使い方、手作りを伝授!



組合員さん 生協さんが頑張らして下さるのですね、ありがとうございます。いろいろなものを購入しようと思いました。

米こうじを買って、甘酒を作ってみました。こんなに甘みが出るのもびっくりです。

日頃無関心だった食品に味は、沢山のことに知り、後の不健康、毎日の積み重ねがいかほど不健康を感じました。これから出来る限り気を取り直し、体に良い発酵食品を取りたいと思います。

先輩組合員さんが米こうじで作ってきてくれた手作り甘酒

テンペのお話が勉強になりました。高橋徳治さんの練り製品はとておいしいですね。スノーピークとちがいで教えていただいて、ピクニックお楽しみ。添加物は鎌倉ソーセージも...! いろいろ教えて頂いてありがとうございました。

「秋の試食説明キャラバン隊」これからの日程!

	日程(曜)	地区	会場	時間
2回目	10月16日(火)	つくば市	小野川交流センター調理室	10:00 ~ 12:00
3回目	10月25日(木)	流山市	生涯学習センター厨房	9:45 ~ 11:45
4回目	10月30日(火)	守谷市	常総生協本部	10:00 ~ 12:00
5回目	11月9日(金)	牛久市	中央生涯学習センター調理室	10:00 ~ 12:00

(持ち物) エプロン、筆記具 どの会場において頂いてもOKです!ぜひお友達も誘っておいで下さい。

【今週のニュース】

- (1P) 秋の試食説明キャラバン隊がスタート
- (2P) 放射能健康影響調査 **尿検査、甲状腺検査 協力者募集!**
- (3P) 組合員健康アンケート(表)、検査協力申込書
- (4P) 小児甲状腺がん「事故と無関係」一即断は禁物 チェルノブイリで甲状腺がん治療にあたった菅谷医師(組合員・生産者・職員のひろば) 組合員・職員で街のチランまき、ありがとう。茨城の浜からこんにちは!

【折り込みチラシ】 **秋の生協まつりご案内、やさとの仲間だより vol.2**
放射能に負けない身体作り・・・ **べっぴんテンペポタージュ改良!**

戦後はじめての「大きな被ばく体験」 診察と慎重な観察で、早期発見・早期治療を 尿検査と甲状腺検査の協力者を募集します。

国の責任における診察体制の要請と共に
生協として以下を先行実施します。

- ① 尿のサンプリング検査（定常化した低線量長期被ばくのマーカーとして）
- ② 甲状腺等の検診支援 診断情報の共有

【客観的状況】

昨年の福島原発事故による放射性物質の放出でホットスポットとなった茨城・千葉エリアにいた私たちは、高濃度の放射線を内外から浴びたことは事実です。おそらく生まれてはじめての経験だったと思います。

私たちの身体は、放射線への生体反応をしながらも、確かに損傷に対する生体防御機構をフル稼働させて身を守ることをしていたと思われる。

右ページの表は、生協内で実施した健康に関するアンケートの結果です。

【いちばん弱い人の立場に立って】

放射線への感受性は年齢、性別、個人差があり、一様ではないと考えられます。一人一人違います。

こうした時、わたしたちは常に、いちばん弱い立場から考えることが大事だと考えます。

原発を推進する人たちがよく言う「放射線防護」の考え方・・・たとえば「1万人に5人がガンになる程度の確率」とか、「社会的便益を享受するのだからリスクは受忍すべきだ」というのは間違っています。

少数だからとか、特別な人だからとかではなくて、一人であろうが、その人にとってはかけがえのない健康であるはずで。

とりわけ、細胞分裂のスピードが速く放射線感受性が高く、将来ある子どもたちには最大限慎重で予防的な万全の措置をしてあげることが私たちの責任と考えます。

【委員会からの要請】

理事会の下につくられた「脱原発・暮らし見直し委員会」から、『チェルノブイリの健康影響』論文の翻訳作業を通してチェルノブイリの教訓を日本の状況にあわせて生かすために、理事会は組合をあげて健康調査診察をすすめるよう強い要請がありました。

【自分たちでもできることから始めよう】

要請を受けて理事会は、健康調査や診察を国が責任をもって実施する体制を早急に整備することを求めてゆく準備をすすめています。

しかし、もしかしたら事態がすすんでいる可能性もある、何が起きるかわからない。国がやるのを待っていては遅いかも。やっぱり心配。とりあえず私たちでできる限りの万全を尽くしておこうと上記の検査を先行実施することとしました。

全数調査という訳にはゆかず、限られたサンプル数しかできませんが、それでも実施します。検査に協力いただける組合員を募ります。

今期、事業が厳しい中でこれ以上の負荷を躊躇していましたが、昨年3月にいっしょに立ち上げた「母乳調査・母子支援ネット」（事務所：名古屋）から検査費用の支援を頂けることになりました。

支援ネットのみなさんは、長くチェルノブイリ支援活動の経験があり、ホットスポットになったエリアでの対策の遅れをたいへん心配してくれていました。感謝です。

【検査・調査の要領】

○尿検査

体内被ばくレベルの指標（マーカー）として調査します。

放射能検査は生協のゲルマニウム半導体で検査します。腎機能と尿の濃度は尿を病院で検査します。数日の蓄尿はたいへんですが、尿への排泄量から体内のセシウム量を推定します。食事についてのアンケートもあわせて実施します。3ヶ月単位の推移を見て、低減しているのか、摂取と排泄が平衡状態にあるのかも判断します。

（対象）離乳後の幼児から高校生

（人数）各市町村から2～3名、計30名

（日程）3ヶ月に一度、計3回

（方法）2リットル蓄尿（紙おむつは別）

（検出限界）各核種 0.2 ベクレル /kg（8時間）

（その他）尿中クレアチニン及びナトリウム濃度の測定は守谷市内の病院で実施します。

※すでにお知らせしていますが、食品汚染のレベルはチェルノブイリ事故と違って低いレベルで、また消費者意識も高かったことから経口摂取は注意深く回避されているとは考えられるものの、生協での尿の先行予備調査では不検出が少なく、1リットル当たり0.5～1.5ベクレルの日常的排出があること、二次調査でも低減していないことから、摂取と排出の体内平衡状態にあって、低線量長期内部被ばくの状態にあり、放射線抵抗力アップや排泄を促す食事が生協の強化月間となっています。

○甲状腺診断・血液検査

小児甲状腺は従来診察されることがなかったことから、健常な状態（ベースライン）の検査から始めて、診察経験を積まなければならないようですが、いづれにしても早期発見・早期治療が肝心で、変異を発見できるよう今から準備しておくことが必要と考えます。血液検査ではリンパ球の異形等を調べます。

生協で実施した健康アンケート

【第一次アンケート】			【第二次アンケート】		
実施日 2011年12月			実施日 2012年3月		
回答数 88			回答数 511		
【1】避難の有無			【1】家族の健康変化の有無		
3/15	自宅	63	変化あり	100	
	県外避難	11	特に変化なし (無回答)	344 67	
3/21	自宅	46	【2】家族の健康変化の性別		
	県外避難	27	男性(児)	48	
【2】家族の健康状態			女性(児)	112	
健康変化なし		35	【3】家族の健康状態		
健康変化あり		53	特に変化ない	35	
変化 の 状 況	鼻血	14	健康変化あり	53	
	疲れやすい	12	変 化 の 状 況	鼻血	23
	だるさ	10		だるさ	22
	喉の痛み	7		皮膚炎	18
	頭痛	7		口内炎	17
	手足痛み	7		下痢	17
	下痢	6		喉の炎症	12
	あざ・内出血	5		耳鼻の不調	10
	目がかしい	4		頭痛	9
	風邪ひきやすい	4		目がかしい	9
不安・うつ	3	微熱		7	
意欲出ない	3	消化器不調	6		
			心臓不調	6	
			生理不順	6	
			紫斑(あざ)	1	
			ストレス	45	
			その他	19	

(理事会まとめ)

（対象）離乳後の幼児から高校生

（人数）計20名ほど

（方法）申込みを受けた上で、よく相談しながら医療機関、専門医を選定し、経過観察も含めてすすめます。

※すでに医者にかかって甲状腺検査や血液検査をされた方がいらっしゃいましたら、その経緯や診察結果を情報提供下さい。情報を共有したいと思います。

下記申込書で、まず協力者申込みを受付けます。折り返し相談をさせていただきます。

.....きりとり.....

尿検査、甲状腺検査 協力申込書

（協力検査） ①尿検査 ②甲状腺検査 (○をつけて下さい)

(市町村名) (コース名) (班名)

(組合員No.) (組合員名) (連絡先 TEL)

(参加される児童の情報) 年齢 歳、性別 (男・女)

(参考) 9/27 付 北陸中日新聞から

福島の小児甲状腺がん「事故無関係」、危うい即断 医師の菅谷・松本市長が警鐘

9/27 付 北陸中日新聞からの転載

— 福島の小児甲状腺がん「事故無関係」、
危うい即断 医師の菅谷・松本市長が警鐘—



福島原発事故に伴う福島県の調査で、1人に小児甲状腺がんが見つかった問題。同県立医大は事故の影響を否定したが、1986年のチェルノブイリ原発事故後、現地で甲状腺がんの治療に当たった医師の菅谷（すげのや）昭・長野県松本市長は「即断は禁物」とし、丁寧な対応を訴える。

「このデータをまさか日本で必要とする日が来るとは思わなかった」

そう語りつつ、菅谷市長はベラルーシ国立甲状腺がんセンターから入手した小児がん患者数(15歳未満)の推移のデータを示した。

チェルノブイリ(ウクライナ)は国境近くにあり、ベラルーシは深刻な汚染にさらされた。同センターは急増した小児甲状腺がんの治療などのため、90年に設立された。菅谷市長は甲状腺がん専門医として96年から5年半、同センターの活動に携わった。

菅谷市長が目にするのは、ベラルーシの場合、86年には2例だった小児甲状腺がんが、翌年には新たに4例、88年に5例、89年には7例と増加している点だ。

今回の福島県での結果(検査対象は18歳以下)について、検査を担当する県立医大の鈴木真一教授は「チェルノブイリ事故でも、甲状腺がんが見つかったのは最短4年」と説明したが、同市長は「事故後、早い時期に甲状腺がんが発生する可能性は否定できない。現段階では『分からない』としか言えないはずだ」と即断をいさめる。

菅谷市長が入手した同センターの資料によると、86～97年の小児甲状腺がんの患者570人のうち、半数以上の385人にリンパ節転移が見られ、16.5%に当たる94人が肺に転移していた。



甲状腺がんは進行も遅く、早期に治療すれば完治するとされている。ただ、菅谷市長は「ベラルーシでは、転移していたケースが非常に多い。将来にわたって、注意深く経過を追わなければならない」と指摘する。

診察よりも調査を優先している検査体制にも疑問を投げかける。

「しこりがあると言われたら、親は心配するに決まっている。でも、同じしこりでも水のたまったのう胞はがんにはならない。心配なのは肉のかたまりである結節。一人一人への丁寧な説明を怠ってはならない」

県側は一定の大きさのしこりが見つかり、2次検査した子どもたちについては「個別の経過観察をする」とし、他の子どもたちは2年に1回検査するとしている。

だが、菅谷市長は「心配な保護者には、むしろ他の機関でも調べることを勧めるべきだ。データをまとめるには、県立医大に送るよう指導すればよい。保護者の不安解消が大切だ」と語る。

ちなみにベラルーシの子どもらの甲状腺がん検査は半年に1回。同市長は「子どもが甲状腺がんになった場合、何年も治療や検診を続けねばならない家族の苦しみは深い。現地の往診で、そんな姿を見てきた。チェルノブイリの先例に真摯(しんし)に学ぶべきだ」と話した。